

## 英国のハイスクールでの日本語教育実践レポート —ともに生きる世界をめざして—

ミドルトン晶子 (グリーンフォードハイスクール 日本語教諭)  
Shoko Middleton (Greenford High School, London, UK)

### 1. ロンドンの多文化の学校で

「わたしたちは、おなじ世界の市民」

これは、日本語を学ぶ当時 10 年生の生徒たちのグループ「紙人形」が作った歌のタイトルだ。この歌で賞をとって、この歌を日本の交流校に行って歌った。

ここは、英国ロンドンのグリーンフォードハイスクール。多民族多文化の公立セカンダリースクールで、7 年生から 13 年生まで (11 歳から 18 歳ぐらいまで) 合計約 1,800 人の生徒がいる。そして、多数の生徒が英語以外に継承語を持っている。私はここで、日本語教諭として勤務 10 年目になるが、ここでの 10 年間で振りかえりつつ、英国の日本語中等教育の一例として、皆様にご紹介したいと思う。



グリーンフォードハイスクール

英国では、GCSE (英国中等義務教育修了資格) や A Level (上級レベル。大学入試に使える) という資格試験が生徒の進路に大きくかわるのだが、選択科目のひとつに日本語があることから、私学だけでなく公立中高でも日本語が学べる学校が存在する<sup>(1)</sup>。実は、一昔前のランゲージカレッジ (語学教育重点校) 制度があったころは、認定校に多額の助成金が交付され

たために、日本語を提供する学校が増え、ノッティンガム大学やシェフィールド大学の PGCE コース (Post Graduate Certificate in Education; 英国の中等教育の教員資格がとれる 1 年間のコース) に日本語の教員養成課程もあったほどなのだが、ここ数年は教育予算のカットが続き、日本語コースを閉鎖する学校もあり、危うい状況となってきているのが実情だ。だが、日本語人気は衰えるどころか、生徒たちにはマンガやアニメの浸透もあり、ますます人気となっている<sup>(2)</sup>。

### 2. 本校のめざす実践

さて、本校は、公立のセカンダリースクールで、11 歳で入学する 7 年生から 11 年生までが、制服を着る義務教育課程のカリキュラムでいわば中等部、その終了時には GCSE (General Certificate of Education) を受験する。12 年生と 13 年生は高等部 (私服で、授業のあるときだけ来ればよい) で、大学進学資格ともなる GCE A Level (General Certificate of Education, Advanced Level) の取得をめざして勉強している。英国では、これらの試験結果によって各学校がランク付けされ、予算配分や学校の存続などにもかかわってくる。ちなみに、グリーンフォードハイスクールは、イーリング区内の公立学校では、常に 1 位 2 位を争う好結果を出している。入学時の学力と終了時の学力の伸びが、全国でも上位らしい。

外国語は、ナショナルカリキュラムの外国語科 (Modern Foreign Languages; 以下 MFL) としてフランス語、スペイン語、ドイツ語を 7 年生から提供している。日本語は 9 年生ごろから 2 年または 3 年かけて GCSE 試験をめざすコースを、さらに 12, 13 年生には、A Level 試験をめざすコースを提供している。

本校でめざしている日本語教育は、まずは GCE や GCSE 試験で求められる日本語の「読む、書く、聞く、話す」の 4 技能を伸ばし、生徒の将来にも学校の将来にも必要な試験対策をしつつも、学年を超えての相互助け合い、日本文化理解、あらゆる異文化理解や国際交流のための日本語教育である。その実現のために、様々な取り組みを本校では行っている。例えば、中学生の日本語授業には、空き時間のある高校生がアシスタントとして入り、後輩の手助けをする。高校生は中学生にとってすばらしいロールモデルになるとともに、学習経験を活かして教員の思いつかないような日本語の勉強方法などを伝授してくれるのだ。このように先輩との協働学習も通じて GCSE 試験をめざすコースで基礎を養い、A Level 試験をめざすコースではさらに、短編小説の読解や映画を通じてさらなる語学力、文化理解を深める。また、まだ日本語がカリキュラムに入る前の 7 年生 8 年生も含めて、昼休みに「日本語クラブ」を開催しているのだが、これも上級生がイニシアティブをとって、日本語の初歩会話や、アニメやまんが、ドラマなどを通じて後輩指導をしている。過去には、韓国留学経験のある英国人の理科教諭と一っしょに、Japanese & Korean Club を開くと、K-Drama、K-Pop オタクの高校生が喜んで全体をしきってくれて、好評だった。

その他、各段階で、ペンパルスキーム（文通を通じた日本の生徒との交流）、帝京ロンドン学園との交流（相互訪問やランゲージアシスタントの職場体験など）、音楽科とのコラボ、外国語科（MFL）内でドイツリートを歌うクラブなども実践してきた。

また、青年劇場の俳優 大島恵子さんによるドラマワークショップや、Japan Society の援助で英国を拠点とするアーティスト望月あかりさんと一川響さんによる演歌と三味線のワークショップなども実施した。

英国の中高生のための日本語スピーチコンテスト<sup>④</sup>では、本校も毎年決勝進出を果たし、人種差別とたたかう小説を扱ったスピーチなどで、生徒が優勝した。国際交流基金、大使館とスポンサーのおかげでこのような大会が行われているのは、たいへんありがたいことだ。

おかげさまで評判を呼び、高校生、大学生に加えて、日本からたくさんのお客様も本校にみえた。教員研修グループ、そして Japanese First Lady がいらした折には、生徒たちは実に立派に対応して、頼もしかった。

このような様々な活動を通して、試験対策ではなく、学年を越えての相互の助け合いといった理念を、授業やクラブ活動の実践の中で実現してきた成果が現れていることを感じた。



グリーンフォードハイスクール日本語教室前の壁はこのようにデコレーションされている。

和紙人形（左）、ひな人形（右）



### 3. 多言語・多文化環境（複言語・複文化環境）を活かして

特異な実践としては、日本語授業でも、学習中の外国語（日本語）と継承語を活かした多言語の歌をつくることを課題としてみたこともある。学校での外国語教育以前に、すでに複言語、複文化の中で生活している生徒たちが、教室に集まっているので、この潜在的な力を活かして、外国語学習をより活性化できないかと考えていたからだ。これは、英国の高等教育機関連合が中等教育段階での MFL 外国語学習を奨励する歌の大会「The Language Factor Song Competition」がきっかけだった。ロンドン大学 SOAS の Routes Into Languages が主催する事業で、英語以外の言語を使って歌を作り、演奏したビデオを審査し、本選では SOAS にて発表会をするというものであった。意義あるテーマにそって、生徒たちの創造性を伸ばし、音楽という形で発表するというすばらしい企画である<sup>4)</sup>。

2012年のテーマは、「Friendship, 友情」。9年生日本語クラスの生徒は、皆が学んでいる日本語をベースとしつつ、多言語を含んだ歌を作っていた。7人のメンバーで協力して、日本語の歌詞は全員で、さらにメンバー各自の特技を活かし、タイ語、ネパール語、パンジャブ語、ヒンディー語などを盛り込んだ歌を作り、曲をつけ、音楽科の協力を得て大会に出場した。2013年のテーマは、「Citizens of the World, 世界市民」で、10年生になった同じメンバーは日本語のみですてきな歌を作った。そして、2014年「World Cities, 世界のまち」では、8年生の男子を中心に、MFLで外国語として勉強している日本語にフランス語、スペイン語、ドイツ語も含め、継承語のパンジャブ語、グジャラティ語、ロシア語も入れて皆で教えあった。こうして3年連続出場させてもらった。

毎年、活気あふれるプロセスで歌ができあがった。成果として、日本語への学習意欲が増したことに加えて、この歌作り大会に参加できたことで生徒たちが自信を得たこと、また、継承語に対する誇りの気持ちが持てるようになった

ことなどが挙げられる。さらに、お互いの言葉で歌うことで、クラスの親密度が増し、日本語で言いたいことを歌にして何度も歌っているうちに、自然と表現や語彙が身についた。

このように日本語クラスでは、文法や語彙、文化や習慣の類似点・相違点を、いわゆるアングロサクソンの伝統的英国文化だけでなく、各生徒の継承文化とも比較することで、知識が多様になり、自分以外の文化への寛容さが身につくこともめざしている。

### 4. 外国語を学ぶことで広がる可能性

#### —高校生の意見—

本校では長期にわたる積み立てなどとともに、グレートブリテンササカワファンデーションの助成金をいただいて、4年に一度の日本研修旅行を企画実践し、交流校を訪問し、ペンフレンドとも対面してきた。日本人生徒との合同イベントでは、歌の発表や、調理実習、ソーラン節体験などもいっしょにした。そして、旅行後には生徒主導のアゼンブリー（全校生徒集会）で、外国語学習の大切さをテーマに「その人のことばで話しかければ、心に届く」というマンデラの言葉を引用して、自分自身の経験から学んだそのメッセージを全校生徒に伝え、好評を博した。

英国では、外国語は主要教科ではない。英語と数学が最重要、次に理科、その後に、外国語が来る。そのような環境で、外国語学習の楽しさや広がる可能性、その重要性を、生徒が自分たちのことばで語ってくれたことは何よりだった。発表した生徒たちが、実際に日本に出かけて日本語をがんばって使い、日本での交流活動をやり遂げたすばらしくクールな写真を見せながら、海外はおろか、ほとんどセントラルロンドンにも出かけたことのない若い生徒たちに語りかけるのは、頼もしい限りだった。森村学園の生徒たちとのアクティビティ、獨協学園での文通相手との感動の対面、桜丘小学校の大縄跳び体験など、お互いに外国語として学んでいる日本語と英語を一生懸命使ったからこそできた交流、そして、お台場の未来館や NTT



浅草にて。日本研修旅行の一コマ

DOCOMO ショールームでの日本の科学技術のすばらしさ、浅草、鎌倉でのお寺や神社の訪問、さまざまなバラエティーの日本食、本場のカラオケ体験。どれをとっても中高生の好奇心をそそるものばかりで、これ以上の語学学習プロモーションはないと感じた。アセンブリーの最後の Act of Worship (お祈りまたは内省の時間) で、高校生のリーダーは、こう締めくくった。

「さて、みなさん、目を閉じて、考えてみてください。外国語を勉強することで、自分の未来にたくさんの扉が開かれるということ。ぼくたちは、奮闘しながらも、日本のことばをがんばって使ってみて、本当にそのことを感じました…。ご清聴ありがとうございました。」

## 5. さいごに

日本では来年2019年はラグビーワールドカップ、そして再来年2020年は東京オリンピックと、大きなイベントがつづく。こんなとき、英国の生徒たちは、ますます日本に興味をもつことだろう。日本に興味をもつそんな生徒たちが、日本語を学習するチャンスを持ち続けることができ、日本や世界の生徒たちと協力して平和な世界を築いていく未来が開かれることを願ってやまない。

## 注

- (1) 国際交流基金が実施する「2015年日本語教育機関調査」では165の中等教育機関において、日本語教育が実施されている。なお、イギリスの日本語教育全般については「日本語教育国・地域別情報 英国 (2017年版)」<<https://www.jpff.go.jp/j/project/japanese/survey/area/country/2017/uk.html>>、及び国際交流基金ロンドン日本文化センターの機関リスト<<http://www.jpff.org.uk/language/listofschools.php>>が詳しい。(2018年6月30日閲覧)
- (2) 2018年5月現在のイギリスにおける日本語教員の資格要件と教員養成コースを提供している機関については、国際交流基金ロンドン日本文化センターが作成している資料が詳しい。  
<<http://www.jpff.org.uk/download/Guidelines-for-Potential-Teachers-2017-Japanese-Version.pdf>> 2018年6月30日閲覧
- (3) このスピーチコンテストは「Nihongo Cup」と呼ばれるもので、Japanese Language Committee of the Association for Language Learning (英国の中等教育MFL教師会の日本語部局) と国際交流基金ロンドン日本文化センターとの共催で開催されている。詳細は以下のページを参照。  
<<http://www.jpff.org.uk/language/speechcontests.php>> 2018年6月30日閲覧
- (4) 「The Language Factor Song Competition」は現在は実施されていない。

## 参考資料

- (1) グリーンフォードハイスクール (Greenford High School)ウェブサイト<<https://www.greenford.ealing.sch.uk>>
- (2) グリーンフォードハイスクール 現代外国語科 (Greenford High School MFL) Twitter アカウント  
<<https://twitter.com/ghsmflofficial?lang=en>>